禅における心身について（二十九）　　ディオニュソスから学ぶ「腰を据え気を充たす」姿勢（四）

①前回の原稿で、私が15歳（高校1年）の時に課題図書で読んだロマン・ロラン著『ベートーヴェンの生涯』とロダンのことを取り上げました。ロダンは、姿勢を論ずる際、「mouvement」（ムーヴマン）というキーワードを重視しました。このフランス語は、英語ではmovement（動き）ですが、これを高村光太郎は「動勢」と翻訳しました。今回の原稿では、ロダンを日本に紹介した第一人者である高村光太郎が、その本をいかに読んだかを紹介し、その後で禅における心身を論ずる際にも極めて重要であると思われる「動勢」に関して見ていきたいと思います。

●②「絶望の淵から立ち上がるために」　　　今年（2020年）の12月16日は、ベートーヴェン生誕の250年目の記念日です。ベートーヴェンは1827年に亡くなっているので、あと6，7年経つとベートーヴェン二百年忌にあたりますが、高村光太郎は、「楽聖をおもう　ベートオヴェン百年忌を迎えて」という文章を1926年に書いています。私が15歳で読んだロマン・ロラン著『ベートーヴェンの生涯』は片山敏彦訳ですが、高村光太郎は別の訳者（高田博厚）による同じ本を読み深く感銘を受けて、その文章を書いています。

③　ロマン ロランの「ベートオヴェン」は… 彼の魂を実に遺憾なく書いている。これは唯の伝記、唯の説明ではない。もっと**生きた言葉である。殊に青年は。如何なる道に行く者でも必ず読むべき書物と思う**。この書はロマン ロランが自分自身絶望の淵から立ち上がるために書いた力杖である。青年が必ず一度はつき当る**人生の暗夜にこの書を懐にする者は幸である**。（『高村光太郎全集 第７巻』、筑摩書房、255頁）

④　青年に限らず、絶望の淵に倒れてしまい、どう立ち上がってよいかわからないような時は、誰しも経験するのではないかと思います。そのような人生の暗夜に、心に火を点してくれるような出会いがあることは、本当に幸いなことだと私も強く思います。光太郎も、この書を読み込み、音楽に生涯を捧げつくした「殉教者」であるベートオヴェンのことを思い、次のように記しています。

⑤　この恐ろしい殉教者をおもう事は力である。同じく芸術にたずさわる吾等の魂にとってそれはクリスチャンの徒が聖ピエトロを思い、聖ポオロを思うにも増す無限の力である。**彼を憶う時、芸術の徒は現世の岐路に迷えない**。

⑥　これも実に力強い言葉です。私たち仏教徒、禅を学ぶ徒にしたら、お釈迦様を思うこと、臨済禅師（等祖師方）を思うこと自体、「無限の力」だと思います。私たち普通の人生でありがちな悩みとして、例えば、金がない、地位がない、人間関係でうまくいかないなど、いろいろありますが、お釈迦様は家を出た後は、持ち家もないし、金もないし、社会的地位もなにもありませんし、逆に迫害してくる人はありました。ですが、道を求める志がはっきり定まり、道を歩んでいく時には、金や地位や成功失敗や人間関係での悩みなど、「現世」は、迷いやとまどいが死ぬまで続くでしょうが、お釈迦様や臨済禅師を思い、その道を歩むとき、現世の岐路の真っただ中で、迷いなく歩んでいく道が開けます。

　「**お釈迦様を思う時、私たち仏教徒は現世の岐路に迷えない**」、これは実に力強いことだと思います。

●⑦「私の頭がくだらなくなりかけた時」　　　さて光太郎は、音楽に関しては素人ですが、プロの彫刻家ですから、ベートーヴェンを語る際に、ミケランジェロを引き合いに出します。「ミケランジェロを何故語るか。あたり前すぎるが彼を語る事はベートオヴェンを語る事であったからだ」。（251頁）

⑧　　私の仕事場の戸の一つにロオマで買ったシスチン礼拝堂の天井画の消えかかった安物の写真がはってある。**私の頭がくだらなくなりかけた時、私はそれを見る。この人間の手に成りながら気味の悪いほど人倫を絶した宇宙的作物の奥から来る力は忽ち私を鍛えなおす**。（250頁）

⑨　前々回の原稿で、ミケランジェロ画「アダムの創造」を載せましたが、この絵を含む膨大な天井画・壁画が描かれているのがバチカンにあるシスティナ礼拝堂です。この礼拝堂で天井や壁を見渡すと、「人間がこれほどの（質と量の）仕事ができるものなのか！」と圧倒され、心の襟が正されるように思います。

　光太郎もこの礼拝堂に行き深く感銘を受け、その写真を購入し、仕事場に張り、常に目に入るようにしていたのです。そして、「頭がくだらなくなりかけた時」には、必ずそれを見たのです。

⑩このことに私は深く同意します。私たち平凡な人間は普通にしていると、自分の欲望や周りの状況に流されるだけの日々になりがちです。このように自分の「頭がくだらなくなりかけた時」、臨済禅師の言葉で言えば「萎萎随随地」に陥ってしまった時、そこから立ち直してくれるような何かが絶対に必要だと、私自身は痛切に感じています。なぜかというと、そういうものに触れることがないと、せっかくの貴重な人生を「くだらない」ように過ごしてしまうクセは、死ぬまで直らないように思えるからです。

⑪私にとっては、それがお釈迦様、臨済禅師（等祖師方）の言葉であり、フィディアス作の彫刻です。ここにはまさに「宇宙的作物の奥から来る力」がみなぎっていると思えます。

そしてそれに触れることが、私を「鍛えなお」してくれることを、私自身繰り返し感じています。もちろん、学校や禅の道場や仕事場、人間の先生や師匠も私を鍛えてくれましたし、深く感謝しています。ですが、いくら厳しい禅の道場であっても、自分自身が、打算と忖度でやりすごす心でいる時には、どこまでも打算と忖度でやり過ごせてしまうのが実情です。

⑫ですが、フィディアスの彫刻は、もちろんフィディアスという人間が作ったものでありながら、打算や忖度をはるかに絶した「**宇宙的作物**」としか思えません。それに向かい合う時に、**「お前は、今のままの打算と忖度だけの萎萎随随地の生き方でよいのか！」という圧倒的な力で私に迫ってきます**。このような仕方で私を鍛えなおしてくれるフィディアスの彫刻、お釈迦様や祖師方の言葉に絶えず触れる必要を私は痛切に感じています。

●⑬「心を必ず原始の生きいきした姿にしてくれるもの」

光太郎も自分がダメになりかけた時、自分をたちまち鍛えなおしてくれるものを、常に目に入るところに張っていたのです。光太郎はミケランジェロの絵を見るとどのように立ち直るかを次のように記しています。

⑭甘いものは飛んでしまい、苦いもの、渋いもの、えがらっぽいもの、すべてけちけちした空気にたまるわらじ虫のような心の中の塵埃は皆焼かれてしまう。あとには出来たてのような心が眼をあげる。心が本来の道にかえる。心は少し赤面しながら再び勇気を奮起させる。単に心を感奮させ、いわゆる襟を正させるものは世の中に少くないが、**心を必ず原始の生きいきした姿にしてくれるものは、ざらにない**。（250頁）

⑮　「**心を必ず原始の生きいきした姿にしてくれるもの**」、このようなものに触れることができるのは、何とありがたいことでしょうか。私の心もすぐに、ワラジムシがはいまわっているような、けちけちしたものでいっぱいになりがちですが、その真っただ中で、心を本来の道、生きいきした原初の姿に立ち戻してくれるものに触れられるということは、人生でざらには巡り合えない幸甚だと思っています。

●⑯魂の呼吸、魂への点火　　　人間には、心を本来の活溌溌地に立ち戻してくれるような何か、そういう根源を求める心があるのではないでしょうか？

⑰　この一つの根源は求めたい。かかる芸術無しに、人は窒息する。人は肺臓の呼吸の外に魂の呼吸がいる。**前者の窒息も重大事であるが魂のそれは更に恐ろしい**。**心の毛孔をみんなあけてくれる芸術、魂の底までも息の出来るようにしてくれる芸術、それこそ人の我知らず求めている芸術である**。

⑱　人はただ空気を呼吸し、ごはんを食べて生きているだけのものではありません。本来の生きいきした姿に立ち返らせてくれるものなしには、私たちの魂は息がつまってきます。ワラジムシがはいまわるだけの状態になった心のままだと、魂が窒息しそうになってしまいます。このような時に、「魂の底までも息の出来るようにしてくれる」何かは、いつの時代でも本当に人が求めているものだと思います。

　⑲**そういう火が時々人類の間に出る**。ミケランジェロを見て私が生きかえるのも**その火の故である**。…

　実際ベートオヴェンの音楽は人を無垢にする。一切を忘れさせる。一切の現世的喜怒哀楽を超越させる。一切の「状態」から解脱させる。**人を「源」にかえさせる**。

⑳　このような「火」を人間の魂に点してくれる人、このような人がこの世に現れることほどありがたいものはないと思います。私たちは、現世の「喜怒哀楽」の真っただ中、その次元の様々な「状態」のなかでうごめいて生きていますが、この真っただ中にいながら、「魂の底まで息」ができるような火を燃え立たせて生きる道が可能です。もちろんベートーヴェンやミケランジェロも、この恩恵を与えてくれる偉大な人です。

㉑　今引用した文章で、光太郎は「無垢」という言葉を用いていますが、無垢や無邪気も、下手にそれを目指すとマイナスにもなりえます（また活溌溌地を全く失った腑抜けたものにもなりがちです）。光太郎は、「世の中に無邪気を志した無邪気ほど邪気、毒気のあるものはない」と、誤解されないよう注意をうながし、真の「無邪気」に関して次のように述べています。

㉒　日本語で普通に意味せられる、邪念が無い、余念が無い、天真らんまん、八面玲瓏、というような消極的な奇麗事とはおよそ違うようだ。自然そのものを信じ切るところから来る。純粋に自分の道に身を投じて**最も意志的に「人間の魂に点火しなければならない」事を念ずるところから来る**のである。… **人を生きいきとした源にかえさせる芸術は貴い。得がたい。そうして死なない**。（253頁）

㉓　ここに書かれていることは、とても大事なことと思います。白隠禅師や臨済禅師の本領も、「雑念がない」というような消極的な奇麗事とは全く異なるものであることは、少しでも白隠禅師や臨済禅師の言葉に触れればすぐにわかることです。最も深い次元での「魂」に点火してくれるのが、お釈迦様や臨済禅師等の言葉であり生き様です。それは、芸術作品という媒体なしに、直接に「人を生きいきとした源に」立ち返らせてくれるところに、実に貴く得がたく、人類が続く限り決して死ぬことのない生きた輝き、人の魂に点火する力をもっているものと思います。

㉔　ただ私たちが、「お釈迦様がすごい」「臨済禅師がすごい」と褒めたたえているだけでは、悪い意味での「無邪気」と同じく、逆に「邪気、毒気のあるもの」となって害毒を及ぼすことにもなりえます。その言葉に触れる私たち各自が、生きいきと自分の魂に点火され、源に立ち返り、鍛えなおされていく道を歩まねば、せっかくの恩恵を無駄にしてしまうと思います。

㉕　光太郎は、「努力する事を許された者は幸なるかなと思う」と書いていますが、そのような道を志し、努力していけること自体、実に得がたい幸せであると思います。

●㉖「私はロダンによって救われ」　　　さて、光太郎は、直接には、「考える人」などロダンの彫刻に出会い、深く感激し、それまでの自分を超えて新たな彫刻家となるべく道を歩んでいきます。ロダンの言葉にも感激し、その伝記や言葉を「私は寝てもさめても手離さなかった。相当に詳しいこの伝記書を実に熱心に読んだ。食べるように読んだとはこの時の事であろう。ほとんど暗記する程精読し、幾遍くり返し読んだか知れない」というくらいロダンに傾倒します。

㉗　そして自分でロダンの言葉を翻訳し、日本人に紹介していきます。翻訳した本の序文に、「**私はロダンによって救われ、ロダンによって励まされた**」と書いています。（全集第16巻の「解題」から）

㉘　光太郎が感激した中で、最も重要なロダンの言葉は、「生命」、そして「動勢」と言えるかと思います。どちらもロダンが極めて強調していることです。

㉙彫刻は石や銅や木材でできていますが、命のないただの物質でははく、人を源に立ち返らせ、最も厳しく人を鍛えなおし、また最も深い安心をあたえてくれるもので、そこに「生命」「動勢」が躍動していることが重要です。この「姿勢」と「動勢」の問題は、禅における心身の問題を考える上でも大きな示唆を与えてくれるものと思います。

　㉚　光太郎は、「**彫刻十個條**」という文章で、彫刻にとって重大な点を十個挙げましたが、その三番目が「姿勢は河の如く、動勢は水の流の如く」です。その説明として次のように記しています。

㉛　**姿勢を貫くものは動勢である**。… 大河をこんこんとして流れる水の勢が彫刻に於ける動勢の意味である。姿勢があって動勢の無い彫刻は水の流れぬ河に等しく、もしくは河の模型に過ぎない。

㉜　彫刻というのは、木や銅などの素材で作られた「姿勢（形）」ですが、「動勢」に貫かれていないと、「水の流れぬ河」や「模型」と同じく、生命の躍動が失われたものとなってしまいます。彫刻家においても、これは陥りがちな過ちであることを、ロダンも光太郎も強調しています。

㉝　これは禅を学ぶ私たちにとっても陥りがちな過ちです。臨済禅師は、言葉でも体の姿勢でも、「活溌溌地」を失った「死んだ形」に陥ったままではいけないということを常に私たちに突き付けてくれています。光太郎やロダンの言葉は、禅の姿勢を学ぶ上でも、とても参考になりますので、次回それを見ていきたいと思います。